

石津 智子 (筑波大学 医学医療系 臨床検査医学)

受賞論文: Prognostic impact of plaque echolucency in combination with inflammatory biomarkers on cardiovascular outcomes of coronary artery disease patients receiving optimal medical therapy. *Atherosclerosis* 2011; 216: 120-124

現在、当院検査部では技師の育休取得の奨励、育休後の復帰しやすい環境づくり、育児中女性技師の管理職採用を積極的に行っている。大学病院の女性医師雇用枠利用を推進している。心エコーリサーチカンファランスは保育園のお迎えに間に合うよう午後4時に行っている。男性医師も夜遅くまで拘束されないよう、心エコーカンファランスは早朝行っている。休日や深夜におよぶ実験では、心エコーグループ内でお互いに協力し合っている。特に子供のいるメンバーを助けることは貴重な経験であるという価値観を共有することを心掛けている。また、循環器病学に継続的に携わることは困難が多いが乗り越えるだけの価値がある尊いものという信念を共有できるよう努めている。

大学院卒業後、同僚男性医師が多忙な救急循環器臨床・僻地医療を担う一方で、当直・オンコール・放射線業務のない非常勤医師の立場で研究継続の機会を与えられた。多くの循環器内科医師に患者登録をしてもらい本研究を遂行し結果をまとめることができた。3人の育児は両親・家族・友人・保育園など子供に関係するあらゆる方の善意と協力をいただいた。

#### 【受賞論文要旨】

現代の最良治療を受けている慢性冠動脈疾患 154 例において中央値 41 か月の期間中 27 例の心血管系イベントが認められた。イベント予測には高感度 CRP と頸動脈プラーク輝度および最大 IMT、およびプラーク数が有用であった。主要危険因子を補正すると CRP とプラーク輝度が有意な予後予測因子となった。特に CRP 高値症例では低輝度プラーク群は予後不良であったが、高輝度プラーク群はイベント発症が有意に少なかった。冠動脈不安定症例の検出において頸動脈エコーによるプラーク量よりも質を反映する輝度情報が有用であることが示唆された。